

著 ◆ 大久保尚子

ビジュアル

# 日本の 服装の歴史

② 鎌倉時代く江戸時代

I 武士のいでたちと中世の武装 鎌倉時代～室町時代 4

- 1 ◆ 武家政権の確立と武士の服装 4
- 2 ◆ 中世の武装 9

II 小袖の登場と新たな染織 12

- 1 ◆ 小袖の登場 12
- 2 ◆ 新たな染織技法と美の追求 17

III 戦国大名とかぶき者 安土桃山時代 20

- 1 ◆ 戦国大名の装い 20
- 2 ◆ かぶき者の登場 22

IV 江戸時代の人びとと小袖 23

- 1 ◆ 小袖とは 23
- 2 ◆ 人生の節目と装い 26
- 3 ◆ 四季と装い 27
- 4 ◆ 身分制度と装い 28

V 江戸時代の武家の服装 29

- 1 ◆ 武家男性の服装 29
- 2 ◆ 武家女性の装い 32

VI 小袖文様の美を求めて 35

- 1 ◆ 小袖文様の見方 35
- 2 ◆ 豪華さを求めて—17世紀初めから中ごろ 36
- 3 ◆ 友禅の登場—17世紀終わりから18世紀中ごろ 38
- 4 ◆ 繊細な美の表現—18世紀中ごろ以降 40

VII 男と女のおしゃれ 43

- 1 ◆ 贅沢をこえたおしゃれ 43
- 2 ◆ 江戸風の登場 44
- 3 ◆ 男女とも好んだ縞や小紋 45
- 4 ◆ 江戸の美意識 46
- 5 ◆ 歌舞伎と流行 49

VIII 庶民の服飾文化 52

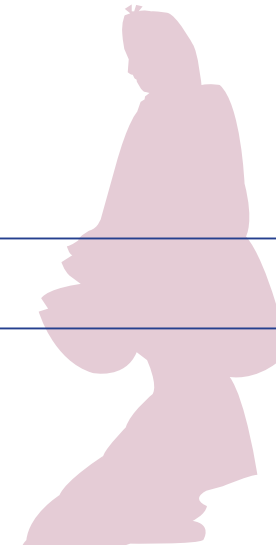
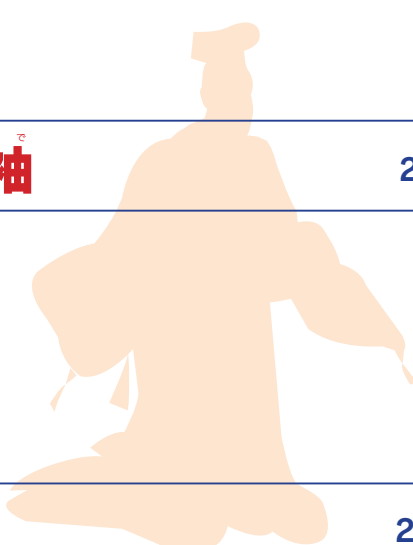
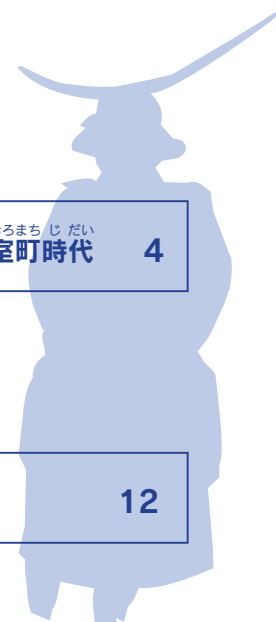
- 1 ◆ 働く人びとと旅人の装い 52
- 2 ◆ ゆかた、手ぬぐい、ふろしき 54

IX 衣服素材の広がりと言生活のいとなみ 56

- 1 ◆ 絹・麻・木綿の生産と加工 56
- 2 ◆ 舶来染織への注目 59
- 3 ◆ 呉服商の発展 60
- 4 ◆ 衣服の手入れと裁縫 61
- 5 ◆ 古着のリサイクル 61

X アイヌと琉球 62

- 1 ◆ アイヌの服装とアイヌ文様 62
- 2 ◆ 琉球の服装と染織 63



# 武士のいでたちと 中世の武装

鎌倉時代～室町時代

## 1 武家政権の確立と武士の服装

平安時代、朝廷や上流貴族に武芸をもつて仕えていた武士は、平安時代末には政治権力をもちはじめました。そして12世紀末に鎌倉幕府が成立します。武士はふだんから活動に適した形の服装で過ごしました。将軍が朝廷の儀式で、公家の装束である束帯や直衣を着用したのを別とすれば、中世の武士の服装には「狩衣」、「水干」、「直垂」の三つの系統がありました。鎌倉幕府では、狩衣、水干、直垂の順に格付けられましたが、武家政権が成熟するとともに、これらが着用される範囲は変化していきました。

### ●狩衣

狩衣は、もともとは平安時代に貴族たちが鷹狩など野外での活動に着たものです。公家服飾の特徴である「盤領」（唐風服飾由来するスタンドカラー型の襟）の装束ですが、身幅が狭く、袖は後身頃の一部のみに縫いつけられ、両脇があいた、動きやすい形をしています。

狩衣と同じ形で「布衣」とよばれる衣服があります。織文様のあるものを特に狩衣とよび、文様のないものを布衣とよぶことが多い

のですが、布衣という言葉で狩衣型の衣服全体を指す場合もあります。布衣は鎌倉幕府では將軍のお供をする場合や、儀式、社交の場などで官位をもつ御家人たちが着用する礼装とされました。頭には立烏帽子をかぶります。

### ●水干

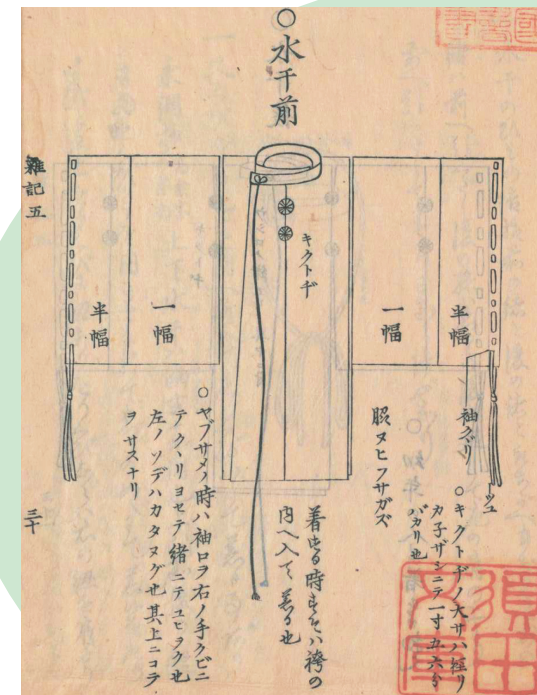
水干は、形は狩衣によく似ていますが、狩衣は裾を袴の外に出して着るのに対し、水干は狩衣より丈が短く、上衣の裾を袴に入れて着る（着込める）活動的な衣服です。襟は紐で結んでとめるため、襟を内側に折り込んで「垂領」の形（きものと同じV字型の襟合わせ）に整えて着ることもできます。襟元を垂領状に整えて上衣を袴に着込める着方は、直垂（6ページ）に近いもので、活発な動作に適しています。水干は、公家が着ていた狩衣と武家ならではの直垂の中間的な性格をもつといえます。水干には縫い目のほころびやすい箇所に「菊綴」がついています。菊綴は縫い目の上から綴じつけた組紐の端をほぐしたもので、補強と装飾を兼ねていました。

水干は、もともとは質素なもので、平安時代から貴族に仕える武士や召使い、庶民が着

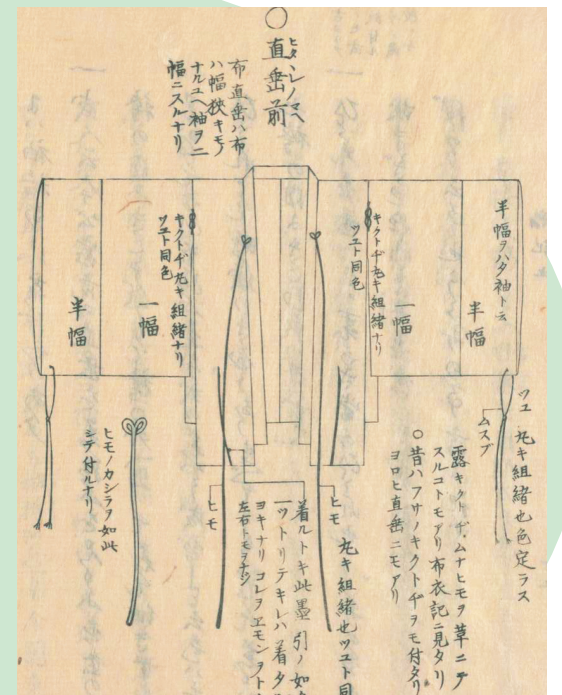
ていました。また貴族たちが遊びの場で水干を着ることもあり、平安時代末、源平の合戦の始まりを伝える『吾妻鏡』には、源頼朝が高倉宮からの令旨を謹んで読むにあたって、水干を身につけたことが書かれています。このころにはすでに、水干が武士の公的な服装になっていた様子が見えます。鎌倉時代になると、武士の水干は幕府へ出仕する時のいでたちとされ、礼装として武芸にかかわる儀式などにも用いられました。礼装となった水干には上等な素材が使われるようになります。



●武士の礼装としての狩衣と水干  
（『後三年絵巻物』1347年 模本 国立国会図書館デジタルコレクション）  
源義家とみられる右の人物は狩衣に立烏帽子の姿で朝廷からの手紙を読んでいる。そばにひかえる武士は襟元を折り込み、垂領型に着装した水干に折烏帽子の姿である。



●水干上衣  
（伊勢貞丈『貞丈雑記』五之下 1843年 国立国会図書館デジタルコレクション）  
盤領で、袖付けは後身頃の一部のみ縫われ、袖口に括り緒（紐）を通し、脇があいている点は狩衣に似ているが、襟の留め具が長い紐なので自由が効き、襟を折り込み垂領風の着装もできる。縫い目補強と飾りを兼ねた房飾り状の菊綴も特徴。



●直垂上衣  
（伊勢貞丈『貞丈雑記』五之上 1843年 国立国会図書館デジタルコレクション）  
垂領で、左右をきものように合わせて胸元の組緒を結び、袴に着込めて着装する。脇の下部はあいているが、袖は前後とも身頃に縫いつけられ、8の字形に結んだ組緒の菊綴がほどこされる。袖括りは略され、「露」と称する組緒を垂らす形式となる。



## ●直垂

直垂（5ページ下の右図）は狩衣や水干とは異なり、垂領とよばれるまっすぐに下がった襟の衣服で、左右の襟を前でV字型に合わせ、胸紐を結んで着ます。菊綴はありますが、水干のような房飾りにはなっていません。垂領の上衣は両脇があいており、丈が短く、袴の中に着込めます。身体にそった上衣と袴の組み合わせは、活動性が求められる武家ならではのものです。

直垂はもともとは庶民や武士の実用着でした。平安時代末から鎌倉時代の初め、12世紀から13世紀にかけての絵巻物には、庶民や下級武士の服装として、直垂の原形とみられる袖の細い上衣と小ぶりの袴が描かれています。しかし鎌倉時代、13世紀の文献では直垂は上級武士にも出仕の時をはじめ広く用いられるようになっていきます。13世紀末以降の絵巻物にも袖や袴がゆったりとした直垂を上級武士が着ている姿が描かれています。たとえば『一遍上人絵伝』には、鎌倉の路上で執権北条時宗が一遍上人と出会う場面が描かれていますが、馬に乗った時宗と



お供の上級武士はいずれも広い袖の直垂姿です。鎌倉幕府の権力が確立するなかで、武士が古くから着ていた直垂の形が整い、社会のなかでの格付けが高まっていったものと考えられています。

## 室町時代の直垂、大紋、素襖

室町時代になると、武士本来の衣服である直垂が武家の服装の中心となり、儀式から日常まで、さまざまな場面で着られるようになります。着用される範囲の広がりにともない、直垂の系統は種類が枝わかれます。

室町時代には、絹製の直垂が、有力な武家の出仕や儀式で着られるようになりました。上衣と袴がお揃いの絹地で作られ、袴の腰（腰紐のこと）は白とされました。重要な儀礼には、裾を引く長袴を合わせます。本来武家が着るものであった直垂ですが、室町時代には幕府と近い関係にある公家も着用しました。

「大紋」は麻布製の直垂で、大きな家紋を上衣と袴に染めたものです。上下揃いの布

## ●武士の公服としての直垂

（『一遍聖絵』 1299年 模本 国立国会図書館デジタルコレクション）

1282年（弘安5年）鎌倉に入った一遍上人が出会った北条時宗一行の姿。馬上の時宗、騎馬で随う武士、徒歩の者、いずれも折烏帽子に直垂。

で作り、重要な儀礼には長袴を合わせます。袴の腰はやはり白です。

「素襖」は武家の日常的な衣服としても着られた麻布製の直垂です。胸紐と菊綴が革製であること、袴の腰が袴と同じ布であることが特徴です。無地のほか模様染めの生地を用いる例もみられます。重要な儀礼には上衣と同じ布の長袴をつけます。

直垂の格が高まったことで、狩衣は、武家社会では重要な儀礼の時にのみ着用される礼服となります。水干は、室町時代には公家社会で元服前の少年の装束とされました。また、公家では成人が私的な装いと着ることもありました。



## ●素襖

（「浅井久政画像」 永禄12年・1569年 東京大学史料編纂所蔵模写 原本：高野山持明院蔵）  
素襖を着た浅井久政（1526～1573年）の生前に描かれた肖像。小紋を染めた上下揃いの素襖を着て折烏帽子をかぶっている。違い扇紋があらわされているが、直垂、大紋と異なり袴の前膝には紋はない。



## ●直垂

（「北条氏康画像」 東京大学史料編纂所蔵模写 原本：金湯山早雲寺蔵）  
直垂を着た北条氏康（1515～1571年）の肖像。上衣の左右後ろ袖と胸、袴の相引と前膝には家紋ではなく、おめでたい鶴亀の紋があらわされる。襟元から中に着た片身替りの小袖（18ページ）がみえ、折烏帽子をかぶり足袋をはく。



## ●大紋

（「毛利元就画像」 天正19年・1591年 東京大学史料編纂所蔵模写 原本：公益財団法人毛利奉公会蔵）  
毛利元就（1497～1571年）の肖像。大きな家紋を所定の位置に入れた大紋を着用。袴の腰が白いことから大紋とわかる。折烏帽子をかぶり足袋をはく。